

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	方 穎琳 【比較社会文化学専攻 平成22年度生】	要 旨
論文題目	日中接触場面における中国人日本語学習者のコミュニケーション方略の研究	<p>本論文は、日本語を媒介言語とする接触場面における中国人日本語学習者のコミュニケーション方略（Communication Strategies, 以下「CS」）の実態を解明し、中国人学習者を対象とした日本語会話教育への示唆を得ることを目的とした。応用言語学及び社会言語学の視点から分析することを通じて、日本語習熟度が異なる学習者が進行中のコミュニケーションで遭遇する意味伝達の問題の特徴、問題を修復するためのCSの特徴の一端を解明した。さらに、効果的なCS使用のあり方を提示した上で、明示的なCS指導を試み、その有効性を確認した。</p> <p>論文は、8つの章（5つの研究）で構成される。第1章の序章では、第二言語（以下L2）学習者が接触場でコミュニケーションをする際の実態について述べ、中国人日本語学習者のCS使用に注目することの意義を論じた。第2章では、まず、L2言語話者の中間言語知識の発達特徴を踏まえ、その上で、L2習得におけるCS研究の必要性を述べた。次に、L2学習者の伝達能力における方略的能力の役割とその役割を体系的に解明したCSの定義および分類方法の理論的な研究を紹介し、1) 話者間の相互作用、2) CSが表現する言語形態（具体的な言語および非言語行動）、3) 話者が意図する概念についての処理、の3者を総合的に取り入れた研究の観点が必要であることを論じ、本研究の立場を明確にした。さらに、L2習熟度要因とCS使用の関係に注目した実証研究から得られた知見と残された課題をまとめ、本研究の課題を設定した。第3章では、分析方法、データ、会話協力者の属性、分析の対象と単位を提示した。第4章から第6章で、実際の接触場面の2者間／初対面／自由会話（22組）のデータを対象に、学習者が使用したCSの実態を探るための実証研究を行った。その結果、学習者の進行中のコミュニケーションで遭遇する意味伝達の問題の特徴について、1) 習熟度の向上に伴い、意味伝達の問題の総数が減少する、2) 習熟度に関わらず、「発話産出の問題」が最も多く現れ、メッセージの成立及び伝達はいずれの発達段階の学習者にとっても困難が生じやすい、3) 理解と産出のどちらの側面でも、語彙的知識の不足・欠陥に起因する問題が多い、4) 学習者が意味伝達の問題を修復するために行った調整について、習熟度に関わらず、理解の問題と発話産出の問題に遭遇した際に、学習者は単純調整と複合調整を両方行う傾向にあることが明らかになった。</p> <p>本研究により接触場で生じた意味伝達の問題を解決するために中国人日本語学習者が使用するCSの特徴の一部が明らかにされた。また「理論研究」「実態調査」「現場指導」という観点から研究を組み立て中国人日本語学習者のCS使用の特徴及び教育への応用について考察した点が高く評価される。</p>
審査委員	(主査) 教授 佐々木 泰子	
	教授 加賀美 常美代	
	教授 伊藤 美重子	
	助教 西川 朋美	
	助教 加納 なおみ	